



# オレンジクロス

～ 理想の地域包括ケアシステム創造に向けて ～

夏号

2022 SUMMER

VOL. 13

## 巻頭言

中田公認会計士事務所  
株式会社中田ビジネスコンサルティング  
公認会計士・税理士  
一般財団法人オレンジクロス監事  
中田ちず子氏

## 第8回 看護・介護エピソードコンテスト

選考結果、受賞作品、受賞者の言葉、講評

## オレンジクロスセミナー

第1回 米国流ニュー・ノーマル ポスト・コロナの暮らし・健康・医療・介護  
メディカルジャーナリスト  
西村由美子氏

## 2022年度セミナー等のご案内



一般財団法人

オレンジクロス



## 巻頭言

### 地域包括ケアシステムへの感謝

オレンジクロス財団の基本理念は「地域包括ケアシステムへの最大の貢献を目指す」ということです。これまで財団の監事を務めさせていただいておりますが、ここ数年、私の実父のことで、地域包括ケアシステムに大変にお世話になり、その重要性を改めて感じました。私事で恐縮ですが父のことをお話させてください。

母が入院したため、父は96歳まで新潟の実家で1人暮らしをしていました。塵一つないほど家をきれいに掃除し、買い物に自転車で行くなど身の回りのことは一切自分で行き、介護や支援など必要としない生活を送っておりました。コロナ禍で東京から新潟へ行くことができなかった一昨年の夏はとても暑く、ある日、父に電話をすると何となく受け答えがおかしいのです。すぐに新幹線に飛び乗って実家に向かうと、熱中症で衰弱し、立てなくなった父がいました。病院に行くと、こんなになるまで放っておいてネグレクトか、というようなことをいわれるくらいあちこちが悪く衰弱しておりました。しばらくして病状は回復しましたが、もう1人で生活できる状況ではありませんでした。とはいってもすぐに受け入れてくれる介護施設はなく、療養型病院に転院させられました。2か月間しかいられないのですが、受け入れてくれる介護施設が見つかるまでいてもよいといわれ、本当に助かりました。幸いなことに、その後、介護施設に母と一緒に受け入れてもらい、しばらくは2人で平穏に暮らしておりました。昨年暮れに肺気腫、誤嚥性肺炎で緊急入院した後は、食べ物を飲み込むことができなくなり、点滴をしてかろうじて生きている状態となってしまいました。医師からは、もはや元のとおりには食べられるようにはならないし、点滴をしていても木が枯れるように衰弱していくといわれました。

衰弱していく一方であれば、1人で病院に居続けるより、意識のあるうちに母と一緒に介護施設で過ごした方がよいのではとしてみるものの、退院すると急激に衰弱してしまうかもしれないと悩み、父が少し食事をとれるようになったと聞けば、もう少し病院で過ごせばもしかしたら回復するのではないかななどと、また悩み、退院になかなか踏み切れませんでした。病院の看護師長さんや介護施設の方にいろいろお話を聞いていただき、揺れ動く気持ちに寄り添っていただきました。そうこうしているうちに母の体調が悪くなって父に会いたがっていると聞いて、ついに3月の中旬に退院し元の介護施設に戻ることにしました。父は退院して本当に良かったといっており、介護施設の方に再会して嬉しそうでした。遠くにいてすぐには駆けつけられない娘としては、そばにいる方々を信頼してお任せできるということがどれほど安心か、当事者として身に染みます。

運営主体が異なる病院間の移動、介護施設への移動については、各施設の相談員の方にこちらの事情を考慮して最善のご提案をしていただけて、本当にありがたかったと思います。地域包括ケアシステムがうまく機能したからこそ、娘として最善のことをしたと思うことができます。

私自身が介護を受けることとなる少し先の未来には、地域包括ケアシステムは、より一層多くの人々に必要とされていることでしょう。研究や活動支援等で地域包括ケアシステムに貢献するオレンジクロス財団の今後のご発展を確信しております。

中田公認会計士事務所  
株式会社中田ビジネスコンサルティング  
公認会計士・税理士  
一般財団法人オレンジクロス監事

中田 ちず子

## 第8回 看護・介護エピソードコンテスト 選考結果

「看護・介護エピソードコンテスト」を通じて、看護・介護で出会ったエピソードを広く募集し、看護・介護のすばらしさをみなさまと共有したいと思います。第8回の選考結果と受賞作品をご紹介します。

大賞	体温が伝わる手紙～あなたが残した愛のかたち～	中島 圭佑 さん (介護福祉士、介護支援専門員)
優秀賞	祖母の応援団	犬塚 千尋 さん (中学生)
優秀賞	「生きる」ことと、私の誓い	栗原 佑果 さん (大学生)
優秀賞	トイしが世界を変える!?	田中 良樹 さん (介護福祉士)
選考委員特別賞	一握りの罪悪感	奥谷 富美子 さん (会社員)
選考委員特別賞	孫の手	山本 彩世 さん (高校生)

大賞

### 体温が伝わる手紙 ～あなたが残した愛のかたち～

中島 圭佑 さん

世界は爛り嘆き、揺れている。一つ一つの出来事が織りなしていた日常は、非日常になった。私たちは絶対に負けない。この世界で抗って、幸せだって叫びたい。あなたが残してくれた勇気と思いを胸に。

雪が深々と降る冬の日、あなたは肺癌で余命宣告を受けた。

あなたは家族や私たち職員に「十分生きたけ、満足。」と笑って言った。一番怖くて、辛いはずなのに、周りの人を安心させようと言ったのだろう。しかし、私はその笑顔の中に隠す、悲しみを感じた。

娘様は「本当は治療して欲しいけど、お母さんの意志を尊重するよ。でも、一日でも長く生きて。」とあなたの胸に顔を押し当てて泣いていた。

あなたは、娘様の頭を撫でながら「そないに泣かないの、うんうん。わかったけ。」と言った。

あなたは疼痛管理以外の治療を拒み、長年暮らした施設を最期の場所として選んだ。

しかし、そんな中、新型コロナウイルスが猛威を振るった。市内の病院や施設でもクラスター感染が相次いで発生し、今

までにない脅威となった。

施設でも万全の体制が敷かれ、感染症対策で面会もオンラインやガラス越しの方法に切り替えられた。あなたが、タブレットを撫でながら優しく娘様に語りかける姿を見て、私たちは歯痒かった。大切な命に限られるあなたの事を、このまま、ただ見過ごす事はできない、いや、したくない。皆がそう思っていた。

だからこそ、私たちはできる限りあなたに寄り添った。

ある日、あなたは「ねえ、字を教えて。私は字が書けんけ、それだけが後悔なんよ。」と言った。戦争で父母を失い、遠い親戚に預けられたが、折り合いが悪く、辛い思いをしたと聞いた。幼い兄弟が多い家計を助ける為に工場で懸命に働いたそうだ。学校に行く余裕はなく、生きるだけで精一杯だったと聞いた。

あなたは言葉を続けた。

「学校に行ける事が本当にうらやましかった。私もずっと思ってたよ、学校に行きたいってね。同級生が工場の前を通るけな、奥にひっこんで隠れてたんよ。悔しいやら、涙が出てね。」と話してくれた。

その後、結婚して夫婦でクリーニング店を開いてからも読み書きできない事で悔しい思いは続いたそうだ。クリーニン

グの受け取り表に名前を書く事ができず、「すみません。字が書けんけ、お名前を書いてもらえんやろか。」と客にお願いするしかなく、時には子どもに代筆を頼む事もあったそうだ。

その事で馬鹿にされたり、辛い言葉を掛けられる事も多かったそうだ。

「勉強する機会はあったんやろね。でも、あつという間に時間が過ぎて今まで来てしまったんよ。」とあなたは話し、下を向いて悲しげな表情を見せた。

私たちに迷いはなかった。あなたの願いを聞き、一緒に頑張る事を決めた。

それから毎日、ひらがなから練習を始めた。私たちも読み書きを教えた経験なんてない。身振り手振りで説明をする職員、手製の教材を使う職員、夜間中学の先生にアドバイスを貰う職員もいた。みんな勤務時間など関係なく、必死だった。

何でそこまでするのかと聞かれた事もある。答えは単純。最期の願いを必死に実現しようとする人を支えるのは自然な事だから。コロナ禍だからできるんでしょ?と心無い言葉を受けた事もある。違う、私たちは介護者としても、人としても一緒に生活をしてきた人の幸せを願うのは当然だから。

ひらがなで五十音を書けるようになった頃には、起きてるのがやっとなっていた。あなたは震え、息を切らしながらペンを握った。あなたはペンを離さなかった。手拭いで手とペンを縛ってでも練習を繰り返していた。

私たちも涙を堪えながら教えた。

みんなあなたに気付かれないところで泣いていた。

そしてある日、「今日はお願いがあるの。一人にして。書きたい物があるけ。あと先生に鎮痛剤を今日だけ抜いて欲しいと伝えてくれんかね。あれ飲むと眠たくなって書けんけ。」と話した。

私たちは希望を受け、心配はあったが、あなたの望むようにした。数時間後、あなたは、書き終え、満足そうな表情で「ありがとう、ありがとう。」と小さな声で私たちに囁いた。

それから一週間後、あなたは天国に旅立った。

最期の一週間はずっと穏やかに眠る時間が続いた。やり残した事を成し遂げたのだろうか、あなたは満足そうに眠っていた。

直接の面会も実現し、娘様、お孫様とも会え、あたたかくぬくもり溢れる家族との時間を過ごす事ができた。家族様の声掛けに反応し、手を握り返す事もあった。

皆であなたの思い出を話しながら、時間を共有していた。

最期の瞬間は、皆に見守られながら、にこりと笑った様に見えた。

あなたが何故ここまで書く事にこだわったのか。

それは手紙を書く為だった。

娘さんと妊娠中のお孫さんへの手紙だ。

「自分が死んだら渡してほしい。」と希望を受けて、私が通夜の後に事情を話し、娘様に手渡した。あなたの希望で、字の勉強をしていた事は家族様には伝えていなかったで、驚いていた。

娘様とお孫様は手紙を読みながら崩れ、声を出して泣いた。

そこには「うまれるいのちをたいし（だいじ）になさい。あなたたちはわたしのいのち。あいし、みまもつています。かなわぬことはない。いつしよ（いつしょ）にいきてくれるひとがいる。わたしのしせつのまごたちのような。しあわせなじんせいだった。うれしいよううれしいよ。」となんとか読める字で書いてあった。

私たちも我慢せず、あなたの前で大泣きした。

今世界は「静」を求め、鮮やかな日常から遠ざかり「無色」になっている。

この無色の世界は、何もしなければ変わらない。

しかし、無色だからこそ、好きな色で彩れば、永遠に広がる。

世界が自然に変わらないなら、必死に抗って変えてやる。

生きることは時に儚くて難しい、だからこそ幸せを感じる時に心がぐっと熱くなる。あなたが自分で色を加え、周りの人からも色を受け取り作りあげた人生は幸せでしたか？

私はあなたに会えて幸せでした。ありがとう。



## 大賞



中島 圭佑 さん

この度は、大変名誉な賞を頂き、誠にありがとうございます。選考委員の皆様、関係者の方々に、厚く御礼申し上げます。2度目の大賞受賞、大変嬉しく思います。

このエピソードを文章という形で残す事は正しいのかと私の中で葛藤がありました。多くの人たちの思いや感情が交差する中で、私の主観的な表現で伝えきることができるのかと悩みました。そこで、完成した文章をこのエピソードの中に登場する「娘様」に読んで頂き、応募して良いかと相談しました。その時に娘様は涙を流しながら「私たちの大切な思い出を残してくれてありがとう。この美しい文章の中にも母は生きています。」と言って下さいました。

死を表現する事はネガティブなのかもしれません。しかし、私が表現したかったのは、そこに紡がれる、生きた証とそれを支える愛情です。このエピソードを通して、多くの方々にそれを感じて頂ければ光栄です。

記憶は時間とともに風化してしまう事もあります。しかし、心の記憶は消える事はありません。それに加えて、私は文章という形で残す事で、関わる人たちの心の記憶の「菜」になればと思います。これからも書き続けます。

この度は、本当にありがとうございました。

## 優秀賞

## 祖母の応援団

犬塚 千尋 さん

認知症の祖父を介護している祖母が洗濯機のそばで座り込んでいました。

「またやられちゃった、これで八回目、ガッカリ」

見ると洗濯機の中に丸いかたまりがあります。

「紙パンツだ」

「今日は新しいパンツまで5枚も入れたから重くて取り出すこともできないよ、助けて」

の SOS です。

水を吸って重いパンツをバケツに取り出して庭の石の上に干しておくとか三日くらいでゴミに出せるくらいに軽くなります。

一緒に洗濯した衣服は紙クズがついて使い物になりません。

「洗濯機を見ると投げ込んで、スイッチを押してしまうから、困るよ、本当に疲れる」

言葉で注意すると

「わかった」

と返事はしてもその場だけでまた同じことを繰り返します。

「何かいい方法はないかね」

祖母はよく僕に相談してきます。どうすればいいかこれまでも考えてみましたがよい考えが浮かばずその場が過ぎれば

「まあ仕方ない」

と流していました。

しかし、今日の祖母の疲れた顔と重いパンツのかたまりを見ると何とかしなければと思いました。

祖父にわかってもらうことは無理です。汚れたパンツは洗濯すればまた使えると思っているのです。パンツが使い捨てとは知りません。祖父の時代には使い捨てはなかったと思います。だから汚れたから捨てることは考えられないのです。

紙パンツを入れても洗濯機が動かなければいいと気づいたので祖母に

「面倒でも毎回、洗濯機のコンセントを抜いて使うときに差すようにして」

と言いました。コンセントは外から見えないように洗濯機の下に押し込むように伝えました。

それからしばらくして祖母にその後のことを聞いてみました。

パンツを入れてスイッチを押しても洗濯機が回らないと

「壊れているぞ、修理を頼まない」と

と言ってくるので今のところ成功しているようです。

「一番の困りごとがなくなって気持ちが楽になった」

祖母は少しだけ元気になりました。

次々に困りごとが出てきます。

今度は二人でお風呂に入り、祖母が先に出ると風呂場にあ

るスイッチを押してしまうというのです。

「追い焚きします」

というアナウンスが聞こえるので

「どうしたの」

「これから風呂に入るから、温かくしないと」

「もう、出るでしょう」

「まだ入ってない」

ちぐはぐな会話になります。

どうしたらいいかね、祖母からの相談です。

またまた考えてしまいました。いい案は浮かびません。

ある時風呂に入ってセンサーのボタンを見ていてひらめきました。

「そうだ、ボタンが見えるから押したくなるのだ」

ボタンの場所を箱でふさいで見えなくしてみよう。

このアイデアも一応、成功しました。

しかし

「この箱は何だ」

とはがしてしまいました。

別の方法を考えなければなりません。

このように祖母からの SOS を受けて考えるのが僕の役割になりました。

高齢の祖父母は二人で山の中で暮らしています。

認知症が進む祖父を祖母が介護しています。離れて住む僕たち家族は介護する祖母の助けになりたいと思っています。

認知症になっても穏やかで明るい祖父と、おかしな出来事を泣き笑いしながら、介護する祖母をリスペクトしています。

僕はまだ中学生でやれることはありませんが、認知症の祖父を介護する祖母の応援団の一人として何かできることはないかと考えたいと思っています。

## 優秀賞



犬塚 千尋 さん

私のエッセーを優秀賞に選んでいただきありがとうございました。祖父の認知症は少しずつ進行していくので介護をする祖母は「気がぬけず大変」と言っています。今まで介護は祖母や母がやっていると思って特に気にしていなかったのですが、だんだん大変になっているので、このままではいけないと思うようになりました。でも何をすればよいかわかりませんでした。一緒に住んでいないので遠くの出来事のように感じていました。

そんな時、祖母からの「困ったよ」を流さず考えることなら私にもできると思いました。考えたことがうまくいくとは限りませんが思いついたことを伝えてやってもらいました。考えるヒントは今とは違う祖父の生きてきた時代はどうだったのかでした。介護は祖母だけに任せないで、家族の皆が祖母の応援団として協力することが大切だと思いました。

私ができることは時間があれば会いに行き祖父の散歩につきあったり、話を聞いたり、困りごとを考えたりすることです。

## 優秀賞

## 「生きる」と、私の誓い

栗原 佑果 さん

私にとって、病気や病院は幼いころから身近な存在だった。物心ついた時には祖母は骨と皮ばかりでがりがりに痩せていて、闘病の末60歳で亡くなった。祖母が亡くなると、今度は祖父が倒れた。持病のアルコール依存症が悪化し、そのうち白血病になり、それが寛解したかと思えば胃がんになった。胃がんの手術を終えて一時退院してすぐ、今度は咽喉にがんが見つかった。父はそんな祖父を献身的に支えた。通院に付

き添い、着替えを持って病院に行く。時にはアルコールの禁断症状で騒ぐ祖父を羽交い絞めで押さえつけ、近隣住民に頭を下げて回ったこともあったそうだ。そんな生活を繰り返しているうち、父の耳はある日突然聞こえなくなった。治療をしたものの、めまいや頭痛の後遺症が残ってしまった。

私が看護師を志望して大学に入学したのは、そんな頃だ。大切な人が苦しんでいるのを目の当たりにして、何もできな



いことが悔しかったからだ。痩せていく、弱っていく、心が不安定になっていく。そんな様子を病室のカーテンの間からそっと見つめていることしかできなかった自分に嫌気が差したからだ。

初めて実習に行ったのは1年生の3月。私は看護師さんに連れられるまま病室に向かった。今でも、よく覚えている。

ナースステーションのすぐ近く。個室の引き戸を開けると、そこには30代半ばくらいの女性患者がいた。明るい茶色に染めた髪は肩のあたりで切りそろえられていて、病衣を着ていることを除けばごく普通の女性のようにだった。私は情けないほど緊張していて、必死に自己紹介をした。そして勉強のために清潔ケアと一緒にさせてもらっても良いか、尋ねた。

すると、その女性患者さんは鷹揚に微笑んだ。

「どうぞ、たくさん見て勉強してください」

病衣の紐を自ら解く。そうして露になったのは、肋骨が浮き出るほど痩せた体と、左右がちくはぐな乳房だった。

翌日、彼女の電子カルテを見た。彼女は小さな子供が二人いるらしい。旦那さんもいて、家族関係は良好なのだそうだ。そして、近いうちに退院する。もう、急性期病棟では診ることが出来ないから。彼女は根治治療を中止し緩和ケアに切り替えるのだ。それはすなわち、近いうちに死ぬということの意味していた。

「どうぞ勉強してください」と言った彼女の穏やかな表情が思い出されて、息苦しくなった。刹那、幼いころから考え続けていた、怒りとも嘆きともいえる疑問が、私の中で激しく沸き起こった。

若いのに、子供も小さいのに。どうしてこんなことが起こらなくてはいけないのだろう。いいことをしていても病気になる人はいるし、悪いことをしていても病気になる人はいる。因果応報とか、日々の行いとか、そういうこととは全く関係なく、ひとは病気になる。治るひともいれば、治らないひともいる。

なんて理不尽だ。

とんでもなく、不平等だ。

私はどうにも平静を保っていられなくなって、先生に話した。すると、先生は「いい実習をしているね」と私の肩をポン、と叩いた。

訳が分からなくて、ただ先生の顔をキョトンと見つめていると先生が微笑んだ。

「先生もね、ずっとそんなことの繰り返しよ。もう辞めよう、自分にはこんなことは出来ない、って思う。それでも騙し騙し続けているとね『この仕事でよかった』って思う時が来るの。もう少し頑張れる、って思う。それでまた打ちのめされて、思いがけず嬉しい瞬間が来て…ってね」

私は驚いた。先生ほどの経験を積んでも、どうにもならない理不尽で溢れているだなんて。

何も言えないでいる私に、先生は続けた。

「看護って答えがないことばかりで嫌になっちゃうけど、沢山感じて、考えること。それを、これからもやめないでほしいな」

実習が終わってから約3か月後、祖父が亡くなった。腫瘍が頸動脈を圧迫して、何度か吐血した後に息を引き取るという壮絶な最期だった。それでも祖父は、血の気のない顔で駆け付けた家族に別れを告げて旅立った。65歳だった。まだ亡くなるには少し若い。それでも、祖父は「悪くない人生だった」と呟いて、逝った。

祖父は正直、立派な人ではなかった。酒に溺れ、迷惑という迷惑をかけ、それでいて孤独にめっぽう弱いひとだった。「頸動脈が破裂すれば、即死です」という医師の見立てに逆らい最初の吐血から3時間ほど生きて、親族が揃ってから亡くなった。

私は、祖父の死に際に、祖父の生きざまを見たような心地がした。

今は大学3年生。わずかばかり経験を積んで、分かったことがある。

それは、「私が患者さんに出会うとき、患者さんは生きている」ということだ。私は生きている患者さんに出会い、そして関わるができる。

私はこれからも、生命の理不尽に遭遇するだろう。それでも「どうして」と悲嘆に暮れるだけで終わりたくはない。私はもう、カーテンの間から無力な自分を呪う少女ではないからだ。

病気でも、怪我をしても、死に向かっている、その瞬間その人は生きている。私に出来ることは何だろうか。何を求められているのだろうか。

正解はない。だからこそ、感じて、考えることを諦めずになりたい。そして「生きる」ことに寄り添う看護師になりたいと、強く思う。

## 優秀賞



栗原 佑果 さん

この度は大変名誉ある賞をいただき、ありがとうございます。選考委員の先生方、関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

エッセイを書くにあたって、過去のことを色々と思い返しました。当時の気持ちを整理していく中で「私はこういう風に思っていたんだ」と自分でも気が付いていなかった気持ちに気付くこともありました。気持ちを言葉にして表現することで、ばらばらに存在していたエピソードが一つの線となって、今の私に繋がっていることを感じるようになりました。

私は順調に行けば、一年後に看護師になります。きっと辛いこともあるのだろうし、綺麗なことばかりではない世界だと思います。それでも、このエッセイを書きながら湧き上がってきた気持ちを忘れずに、看護をしていきたいです。

これから看護に深く携わっていくにあたってとてもよい機会を頂いたと思っています。本当にありがとうございました。



## 優秀賞

## トイレが世界を変える!?

田中 良樹 さん

自分だけの世界で生きているという表現が正しいのかわからないが、彼女は急に歌ったり、泣いたり、笑ったり、怒ったりする。私の会話には耳を傾けず、想像もしないような行動をする。私はどのように接したらいいのか分からないまま、ある意味自由に、ある意味放任した状況を続けていた。

彼女は全く意思疎通が図れないという訳ではない。

「おはよう。」や「こんにちは。」といった簡単な言葉に対して、時々、反射的に同じ言葉を返すことがあった。その時は必ず、一瞬恥ずかしそうに私を見つめ、その後は何もなかったかのように大きな声で歌いながら立ち去って行った。

彼女は若くしてアルツハイマー型認知症を発症した。運送会社のトラックの運転手をしながら2人の子どもを立派に育て上げた。60歳を過ぎた時に、夫を病気で亡くした。「今から思えば、父の死が認知症を発症するきっかけになったと思う。」と長男は語った。

夫の死後、彼女は一人暮らしをしていたが、しばらくして近所を歩き回るようになる。当初、近所の人は健康のために散歩をしているぐらいの認識であった。

日に日に歩き回る行動範囲が広くなる。雨の日は傘をささず、真夏の暑さも関係なく歩き回り、自分で自宅に帰ること

が出来ずに警察に保護されることが増えてきた。また、国道のセンターラインを歩いたり、険しい山道を歩いたり、命に直結するリスクが伴うようになった。

長男は仕事を辞めて、彼女の世話を専念することになった。しかし、昼夜関係なく自宅から外へ出て行ってしまいう状況は、すぐに世話をするのが限界になった。また、彼女が自宅から出られないように、自宅の周りをトタンで囲って柵を作り、鍵のついた部屋で閉じ込められる生活が数年続いた。

経済的な理由から長男は働くことになった。月曜から土曜までの昼間は私が働くデイサービスを利用し、それ以外は自宅で過ごすことになった。

デイサービスでは、施設内で過ごすことが出来なかった。人が集まる空間が苦手だったのだ。毎朝、デイサービスへ来ても、すぐに施設を飛び出し、近所を歩き回る。私は彼女と一緒に歩くことが日課になった。

昼食も施設で食べることが出来なかった。施設の軒下に机を運んで一緒に食べたり、近所の公園に食事を運んで食べたり、施設の食堂という固定観念を外して、彼女が食べることに集中できる空間を毎日作った。施設内で過ごせないながらも、何とかデイサービスを利用できていた。しかし、解決できない問題が一つあった。



それは、トイレの問題であった。

彼女は朝9時にデイサービスへ来てから夕方5時に自宅へ帰るまで一度もトイレに行かないのである。お腹を摩ったり、スポンを触ってソワソワしたり、明らかにトイレに行きたい感じが伝わってくる。しかし、トイレへ案内するも排泄することではなく、すぐにトイレから出てくる。排泄を手伝おうと、「トイレですよ。」「おしっこしましょうね。」などと声をかけながら、スポンを下ろそうとしても、すぐにスポンを上げられる。また、どうしても我慢できない場合は、自ら施設の外へ出て物陰に隠れた場所で排泄されることもあった。

また、デイサービスが終わり、夕方、自宅へ送るとすぐにトイレへ自ら行かれる。それが毎日の日課になっていた。

なぜ、彼女は我慢しているのにデイサービスのトイレを使用しないのか？

悩んだ末に、施設は全て洋式トイレで自宅は和式であることから、洋式をトイレだと理解できないのではないかという仮説を立てた。

施設は全て洋式トイレで和式はないことから、歩いて5分の所にある小学校のトイレを借りることになった。

期待と不安が入り混じりながらトイレへ行った。彼女は最初、落ち着かない様子で何度かトイレに入ったり出たりを繰り返した後に排泄をされた。仮説が確信に変わった瞬間であった。以降も学校のトイレへ行くと必ず排泄をされた。

実は話はこれで終わりではない。

毎日、彼女が学校へ行くことで子ども達が彼女に興味を持ったのだ。最初は興味本位で遠くから彼女を見ていたが、少しずつ距離が近づき、1週間も経つと挨拶するようになった。

それから子ども達が一方的に彼女に話しかけるようになった。彼女は嬉しそうに大きな声で笑ったり歌ったりして子ども達に応えた。

しばらくすると学校で認知症という病気を学ぶきっかけとなり、子ども達との交流が始まった。子ども達は年間を通して認知症の理解を深めながら施設へ訪問を続け、私たちは学校の学習発表会や運動会などに遊びに行き、お互いに親睦を深めている。

彼女には世界がどのように映っているかは分からない。しかし、彼女と繋がっている人達から見る彼女の世界は「認知症」というフィルターに覆われている。事実だけを見て、真実を歪曲した「自分だけの世界で生きている」と決めつけた彼女を見ている。私もその一人だろう。

彼女の真実を追うことで、彼女が生きる世界を知ることができる。また、彼女の生き方は大きく変わるはずだ。そのきっかけを作り出す努力が私にはもっと必要なのだ。

それから8年経ち、今も学校との交流は続いている。

現在の彼女は認知症の進行によって歩けなくなり、特別養護老人ホームで暮らしている。

私は何も変わらずに介護の仕事を続けている。ただ、8年前、彼女に話しかけた一人の子どもと一緒に真実を追いながら仕事をしている。彼女がきっかけを作り出してくれたご縁に感謝している。

## 優秀賞



田中 良樹 さん

大変名誉な賞を頂戴した事に驚きと喜びが入り混じっております。選考委員の皆様をはじめ関係者の方々に厚く御礼申し上げます。

このエピソードは奇跡のようなストーリーですが、決して偶然ではなく必然だったと思っております。また、彼女とのストーリーからたくさんの気づきや学びがありました。それが介護観の道標となり、確実に今の原動力に繋がっています。

コロナ禍の長期化や慢性的な人材不足、ICTの導入等によって介護の仕事に対する価値観は大きく変わろうとしています。また、仕事の効率化が求められる時代となりました。しかし、一人ひとりのストーリーに向き合う事、いわば非効率を大切にすることは福祉の根幹であり不変的です。だからこそ効率と非効率との調和を図りながら、未来の介護を切り開いていきたいと考えております。

介護の仕事は想像力と創造力を発揮しながら人生を伴走するデザイナーだと思っております。ストーリーを丁寧にデッサンし、たくさんの色彩を加えながら、時には影となり、時には光になりながら、幸せのストーリーを実現するためのデザインをともに続けていきたいと考えております。

選考委員  
特別賞

## 一握りの罪悪感

奥谷 富美子 さん

「おいおい何か言ってから逝ってくれよ」  
単行本から目を離さない私の横で、母は静かにその生涯を閉じた。というか、閉じていたようだ。

父と母、病気のデッドヒートを繰り返しながら私の介護歴は15年間以上に亘った。

母が最初に脳梗塞で倒れたとの知らせを聞いたのは、故郷青森から1200キロ離れた大阪の地。嫁に行かない私は働くことが自分の全てだった。

幸い、東京にいた妹が駆けつけてくれたおかげで、一年後には旅行に行けるほど元気な母に戻っていた。

仕事に疲れ「そろそろ親が心配で」という美名の元に故郷に帰った33歳。

一人暮らしの気楽さを手放さず、同居はせずにシングル生活を満喫していたが、ほどなくちゃんと親が介護生活になった。

母、二度目の脳梗塞。

覚悟は決めていたが、右往左往の毎日。それまでしっかり者といわれた私が、言葉も地理も知らぬ異国に一人投げ飛ばされたかのように、泣き喚きもがいた。

想定外だったのは、これまで母に苦勞をかければなしだった父が「俺が面倒を見る。俺がみねばねえべ」と言って退院後の在宅介護を買って出たことだった。

でも、限界はすぐにやってきた。

私の生活も一変した。

仕事終わりに車で40分の実家へ走り、晩御飯と翌日の朝食・昼食をつくり、デイサービスの準備と掃除・洗濯。甘いジュースのカラ瓶を手に、激怒しながら父のインシュリン注射を見守り、火事が心配なので二人が寝室にいくのを待つ、そして鍵をかけ、自分のアパートに戻る。

私の前に父が倒れた。

それから、またてんやわんやの時間が過ぎ、弟に経済的に助けてもらって父と母は施設にお世話になることになった。

同居していれば、私が仕事をやめていれば。自分の親なのに人様からなんて言われるか。私は変な敗北感に苛まれた

が、今は介護のプロに頼って良かったと思っている。

介護に悩む人に私はよくこう言う。

「介護は一握りの罪悪感で優しさをもたらしてくれる」と。

施設にお世話になる前は本当によく怒鳴っていた。

「なにやってんの」「食べないと死ぬぞ」「もうバカ」「しっかりして」

言っではいけないワードのオンパレード。

しかし、敵も負けてはいない。体重が40キロを切った気の強い母に至っては、力弱い声で「意地悪!!くそ娘」と私を罵倒し、グーパンチをかましてくる。腹が立ってこっちも応戦。

ドライブ中、車を路肩に停めて、おばさんとばあさんの喧嘩が始まる。

知らない人が見たら、子猫同志の陳腐な喧嘩に見えたかもしれない。そして必ず自己嫌悪に陥るのは私だった。「病気だっってわかっているのに、またやってしまった」

施設にお世話になるようになってからは、おのずとそんな感情は減っていった。

時はゆっくりと過ぎていった。施設で母の車椅子を押していた父は、やがて自分も車椅子生活になり、晩年胃瘻生活を送った。口から食べ物を取れなくなった父に、母はかわいそうだと思ったのか、よく隠れて自分の食事や飲み物を口に入れるものだから、職員さんが「ぎゃー———」と悲鳴をあげていたのが懐かしい。

そして父は、私に病院で人生を終えるということを学ばせてくれた。

その頃になると「趣味は中途半端な介護です」と言うようになった。

母には「車椅子に乗ったあんといっていると、私がいい人に見えるからさ」と言いながら、プライベートの全てを母との時間に使った。それでもやっぱり在宅で介護をしていない罪悪感が消えることはなかったが、くそ娘が出現する回数は減った。

最後まで胃瘦はしないと頑固だった母の体重は、30キロを切ってきた。

私は、最後にホームホスピスという道を選んだ。

そこは中古の一軒家をリフォームした看取りの施設。味噌汁の匂いで朝を感じ、リビングでご飯を食べ、人の笑い声に包まれながら、やりたいこと、食べたいものがあつたら、できるだけ叶えてもらえた。

ある日「泊まりたかったら泊まってもいいんだよ。隣に布団敷いてあげるよ」と言われた。私はその日から母の隣に寝て、そこから「行ってきます」と仕事に行き、「ただいま」と帰ってきた。真夜中に何度も聞こえる優しいスタッフの声、その献身的な姿に手を合わせた。

そしてあの日の朝、私は母の好きなコーヒーを枕元に置いた。

「いい匂いでしょ」

小さくうなずく母に少し安心して

「私、今夜はアパートに戻りますね。何かあつたらすぐにきますから」

と、台所で夕食を作っている施設の人に言った。

そして、スカスカと体から振り絞るような寝息をたてる母の隣で単行本を開いた。

それは介護を題材にした本だった。47頁、48頁、4・・

太陽の光が薄いカーテンの隙間から私を叩いたようだった。

ふと、母を見ると、冷めたコーヒーの横で旅立っていた。

母が人生最後に見たのは、くそ娘が本に夢中になっている姿だったのか？

「おいおい、痛いとか苦しいとか、なんか言ってから逝っ

てくれよ・・・」

申し訳ないのと、おかしいのと、私たちがいいなと思うのと、様々な感情がぐちゃぐちゃになって、ふっと笑ってしまった。

施設の人は「こんなに穏やかな旅立ちは初めてです」と母を称賛し、10年以上の付き合いになったケアマネさんは、私より泣いてくれた。

それまで紆余曲折を共有してきた主治医に、最後の救いの言葉を求めた。

「先生100点だったかな」

「100点満点だよ」と言い、死亡診断書に「老衰」と書いてくれた。その二文字が母を称える最後の勲章に見えた。

振り返れば父と母とのねちっこい時間は、例えようのない時間だった。

たくさんの人と出会い、たくさんの知識を得て、たくさんの敗北感を味わい、たくさんの笑いをもらい、綺麗事だけでは済まされない現実も知った。

人生足し引きしたら、私にはプラスだった。

あれから4年、やっと携帯電話の着信音で心臓が爆音を轟かせなくなった。

私は、仕事の傍、介護初任者研修を修了し当面使うあてのない資格を取った。

一握りの罪悪感だけはなかなか消えないものだ。

でも、なくてはならない罪悪感だったのだと思う。

## 選考委員特別賞



奥谷 富美子 さん

「まだまだ二人とも何かのお役にたっているみたいだよ」

両親の写真の前で選考委員特別賞を報告しながら、乾杯をしました。

この度は選んでいただきありがとうございます。

初めて介護に直面した時、どれだけインターネットで情報をあさり、お悩み相談で見ず知らずの人に不安を吐露し、大丈夫だよと励ましてもらったことでしょうか。

偉そうになるかもしれませんが、現在介護に直面し右往左往している方へ私からお伝えしたいことは「大丈夫、みんなが助けてくれます。『助けてくれ〜』と声を出してください」ということです。

その声は誰かに届き、きっとあなたにささやかな安らぎと笑顔を運んでくれます。

この先その繰り返しかもしれませんが、その度に誰かが助けてくれます。

そしていつか、あなたご自身が誰かの『助けて』という声が聴こえる人になられるのではと思います。

私自身もこれまでたくさんの方に助けていただいた分、耳をそばだてながら、私なりの方法でお返ししていきたいと思っています。自己過信を戒めつつも、今回の受賞がその一つになっていることを願いつつ、心から感謝申し上げます。

選考委員  
特別賞

## 孫の手

山本 彩世 さん

「これぞ『まごの手』だわ」

私がおじいちゃんの膝をさすると、今日もおじいちゃんが嬉しそうに言った。孫の私がとても弱い力でなでているだけで、寝たきりで固くなった膝の痛みがとれるそうだ。

「孫の手から、いい力が出とるんじゃ」

おじいちゃんが喜んでくれるから、たくさんなでてあげたくなる。

おじいちゃんが心筋梗塞になったのは一昨年秋。日が短くなり、コートなしで下校するのがつらいくらいの時期だった。

もともと心臓が悪かったおじいちゃんは、ある日、異変を訴えて病院に行った。救急車ではなく、母が運転する車でいった。自分の体の中が大ごとになっているとは思っていなかったようで、病院では母に冗談をとばしていたらしい。しかし、検査の結果、緊急入院することになった。

連絡を受けた私が病院に駆け付けたときには、おじいちゃんはICUのベッドで眠っていた。

おじいちゃんはすごく「おじいさん」になっていた。

それはベッドの上で何本もの管につながれているからかもしれないし、しばらく会っていなかったからかもしれない。とにかく、そのときの私には、記憶の中のおじいちゃんと目の前のおじいちゃんが別人のように見えた。小さくて、弱々しくて、枯れ木のようなだった。

その日から、介護の日々が始まった。

部活が忙しかった私は、毎日学校の帰り、真っ暗になってから自転車を飛ばし、病院へ向かうようになった。大抵おじいちゃんは寝ていた。真っ白な清潔な病室で、見たこともない機械が立てる電子音に囲まれながら寝ていた。

お看取りが近いです、と言われた。

おじいちゃんの顔を見るたびに、こんな人だったっけ、と思った。

「たしか、おじいちゃんはもっと大きくて、強くて、私をひよいと抱っこしてくれたはず」

そう考えてはっとした。私はもう高校生だ。最後に誰かに

抱っこされたのは何年も前のこと。私が持っているおじいちゃんの印象は、いったいつで止まっているのだろう。

一人暮らしのおじいちゃんは、私の家のすぐ近くの一軒家に住んでいた。歩いて一分もかからない場所だ。でも、最後に会ったのがいつだったか思い出せない。仲は良かったが、用事が無いので会わなかった。会っても、おじいちゃんと過ごす時間は短く、印象に残らなくて、曖昧な記憶しかない。

いつの間に、おじいちゃんはこのように「おじいさん」になっていたんだろう。

私が小学生だったころは元気だったはずだ。中学に入ったらは？よく覚えていない。高校生になってからは？会ったっけ？

私が自分の事ばかり考えて、家と学校とを往復している間に、おじいちゃんは何をしていたんだろう。どう過ごしていたんだろう。そもそも、おじいちゃんはどうな人だったんだろう。知らないことだらけだった。

お看取りと言われてから二か月半。

おじいちゃんは喋れるまでに回復し、先生や看護師さんや家族を驚かせていた。そして、リハビリをする病院に転院することになった。

そこで三か月過ごした後、在宅介護に切り替えた。

介護のために、私と母はおじいちゃんの家に移った。使われていない、物置のような部屋がいくつもあったから、数か月かけて片づけ、生活空間を整えた。主に母が頑張っていたけれど、週末や長期休暇など、手伝えるときは私も協力した。

おじいちゃんの手紙を片づけたときのことはよく覚えている。本棚の奥までぎっしりと、大量の本が見つかった。医療や福祉に関する本ばかり何百冊も。医療従事者だったと思うおじいちゃん。仕事熱心な、真面目な人だったのだろうと思った。私は、孫である私をかわいがってくれている姿が知らない。働くおじいちゃんを一度見てみたかった気がした。

賞状も見つけたし、水泳用品をはじめとしたスポーツ用品も見た。わからなかったおじいちゃんの輪郭が、少しずつ見

え始めた気がした。

あつという間に春が来て、おじいちゃんは福祉タクシーに乗って帰ってきた。看護師さんやケアワーカーさんなど、たくさんの方の協力で実現した、約半年ぶりの帰宅だった。おじいちゃんは、「おお、帰ったわあ」と嬉しそうだった。

この春で、おじいちゃんが帰ってきてから1年になる。寝たきりで、痛いところや苦しいところはあるそうだが、それでも、お看取りと言われた人だとは思えない。調子がいいときは昔の話をしてくれる。

それは若いころの面白い話だったり、大人になって偉くなって表彰された自慢話だったり、いろいろだ。

先日、おじいちゃんの膝をなでていたときには学校の話になった。おじいちゃんは学生時代、水泳部だったそうだ。部

活に熱中するあまり疲れて授業中に寝てしまい、何度も怒られたという。

この話をするとき、おじいちゃんは楽しそうに笑う。私はスポーツ少年の姿を想像してニコニコしてしまう。その子はきっと私のクラスにもいそうな子で、数年しかない学生生活を思いっきり楽しんでいるんだろう。

「これぞ『まごのて』だわ」

私がおじいちゃんの膝をさすると、今日もおじいちゃんが嬉しそうに言った。孫の私がとても弱い力でなでているだけで、寝たきりで固くなった膝の痛みがとれるそうだ。

「孫の手から、いい力が出とるんじゃ」

おじいちゃんが喜んでくれるから、たくさんなでてあげたくなる。

### 選考委員特別賞



山本 彩世 さん

選考委員特別賞に選んでいただき、本当にありがとうございました。とても嬉しいです。

夏が近くなりましたが、おじいちゃんは元気です。膝の痛みはなくなったようで、私はお話をするためにおじいちゃんの部屋に行っています。昨日は「孫が来ると、おじいちゃんの心配事がすーっと消えてなくなるので、孫はおじいちゃんによく顔を見せる努力をするように」とにこにこしていました。

最近おじいちゃんは、戦争中の暮らしについて話してくれるようになりました。日本が統治していた台湾に住んでいたこと、台湾の言葉も話せたはずなのに今覚えているのは「こちらは台湾放送局です」「コンチクショー」だけであること、日本の敗戦が決まった途端、仲良くしていたはずの台湾の子供たちが棒を持って追いかけてきたこと。現代を生きる私には想像の及ばない、でも知っていなくてはならないことを教えてください。私の中の元気いっばいな少年の像は、いくつもの側面を持ち、より立体的になってきています。

幼いころから私をかわいがってくれること、大きくなった私に沢山のことを学ばせてくれること、そのお礼としては足りないけれど、これからも私はおじいちゃんが喜ぶことをし続けたいです。

## 川名選考委員長よりコンテスト全体の講評

第一次選考を通過した29作品を読みました。テーマとしては、看取りをテーマにした作品が多くみられましたが、介護をポジティブにとらえ楽しく読める作品が増えた印象です。コロナ禍の反動で、そういう作品に目がいくせいもあるのでしょうか。受賞者のうち、3人が学生で、一番若い方は中学生となりましたが、ウケをねらったわけでも、ゲタをはかせたわけでもなく、実力です。届く言葉がありました。選考委員の評価の

違いはあまりなく、穏やかな選考委員会となりました。

大賞には「体温が伝わる手紙～あなたが残した愛のかたち～」(中島圭佑さん、介護福祉士、介護支援専門員)を選びました。人生の最後に文字を書けるようになりたいと願った高齢者とそれを応援した介護職員とのエピソード。残された一通の手紙、つづられたピュアな言葉に射抜かれます。私は「ウ

ルっ」と、溝尾委員は「大泣きした」そうです。中島さんは、今回が二度目の大賞受賞となります。是非が議論になりましたが、再投稿、再受賞を禁止する規定が設けられていないこと、エピソードの力が圧倒的なことから、今回は考慮しないこととしました。コロナ禍で家族との面接もままならない中で旅立っていく人に対し、多くの現場で精一杯職員が向き合った。その一つの記録としても世の中に送り出したい作品です。

優秀賞「祖母の応援団」（犬塚千尋さん、中学生）は、「認知症になっても穏やかで明るい祖父とおかしな出来事を泣き笑いしながら介護する祖母」とそれをリスペクトし、何かできることはないかと考える著者の関係性にほのぼのとした気分させられる作品でした。認知症介護は、発想の転換と工夫の積み重ねですね。「中学生でもできる介護の方法があることが伝わる」（秋山委員）という評価もありました。

優秀賞「『生きる』ことと、私の誓い」（栗原佑果さん、大学生）は、初めての看護実習での学びをまとめた作品。普遍的なだけに陳腐になりがちなテーマですが、自分の体験に重ね合わせ素直にまとめられていて、心に沁みました。「カーテンの隙間から無力な自分を呪う少女」から、今を支える人を支える看護師へと羽化する場面に立ち会ったような気持ちになりました。今の気持ちを忘れずに。

優秀賞「トイレが世界を変える!？」（田中良樹さん、介護福祉士）は、デイサービスで絶対トイレに行かない認知症の女性の介護から始まったエピソード。なぜかという、家のトイレが和式で、洋式だとトイレと分からなかったから。近くの小学校に和式トイレを借りに行くようになり、そこから小学生との交流が始まり、その中の一人は介護職になり、今は同僚というから何かが縁になるか分かりませんね。お年寄りが生きた昔の時代と現代のギャップが描かれていること、介護から地域づくりをする、価値あるエピソードとして、特に秋山委員の推薦がありました。

受賞は逃しましたが、「一握りの罪悪感」（奥谷富美子さん、会社員）を選考委員特別賞として推薦させていただきました。独身30代の時に親の介護が始まり、父母を見送るまで足掛け15年。罪悪感を感じつつ、プロの手を借り、胃ろうを付け病

院で亡くなった父の死に学び、母親は家庭の延長のようなホームホスピスで見送った。横で本を読んでいた著者が気づかないほどの自然死。仕事も続けたいし、親も放っておけない。同世代の「やり切った」介護に共感しました。

同じく選考委員特別賞になった「孫の手」（山本彩世さん、高校生）。介護が始まって祖父と同居、おじいちゃんとしてではなく、「人」としての部分に初めて触れることになった孫目線でのエピソード。昔話を花をさかせながら、「孫の手」で膝をさすってもらう暮らし。選考委員はこのエピソードのもつメッセージ性ととも、充実した作品内容をより高く評価しました。幸せは、日常が日常としてあることだと気づかされた今の時代に価値を増す作品です。

エピソードを職員さんが綴る時に、登場人物の呼称をどうするかまず悩むのではないのでしょうか。一次選考通過作品をそういう視点でしらべてみました。大賞の中島さんは、今回も「あなた」と呼びかけるスタイル。類似の形式では、「彼女」と3人称を使う方もいましたが、どちらも難易度は高め。属性で、「患者さん」、グループホームの入居者を「認知症のおじいちゃん」と呼んだり、「Aさん」と記号にしたり、仮名をつくらせたりリアリティを持たせている方もいます。介護業界では、「ご利用者様」「ご入居者様」といった丁寧な言い回しが当たり前になっていますが、作品の中ではみられませんでした。「様付け」は営業トークではよくても、現場の肌感覚にはなじまないからなのでしょうね。しかし、「ご家族様」「娘様」「お孫様」はありました。遠慮があるのでしょうか。現場の雰囲気だったり、作品による世界観が違うので、マッチしているかが問題で、どれがベストという答えはありませんが、現場での関係性や気配りを読み解く手がかりとして注目してきました。個人的な感覚ですが、職場の決まりだからととってつけたように「様」をつける方は減ってきていて、それだけ作品が厚みを増してきているように感じています。



川名選考委員長

## 【演題】米国流ニュー・ノーマル ポスト・コロナの暮らし・健康・医療・介護

ポスト・コロナに向けて動き出した米国のニュー・ノーマルなライフスタイルと社会規範のトレンドを概観し、健康・医療・介護の「これから」について、メディカルジャーナリストの西村由美子氏にご講演いただきました。



メディカルジャーナリスト  
西村由美子 氏

「いよいよコロナ終息?!」を全米に印象づけたのはフットボール・ゲーム。いかにもアメリカである。元旦恒例のローズボウルには9万人、2月のスーパーボウルには10万人のファンがアリーナを埋め尽くした。ゲーム観戦のニュー・ノーマル・ルールは①ワクチン接種済証明および検査（陰性）証明の提示と②マスクの着用であったが、接戦の好ゲームにファンはマスクなしで熱狂したが、それでもゲーム後に感染者数は増加せず、しかも周辺地域への経済効果は500億円と報じられ、コロナ終息、ポスト・コロナの経済復興への期待が高まった。

ポスト・コロナがエンタテインメントから始まるのはいかにも米国らしい話だが、一方でビジネスはどうか。勤労者は在宅からオフィスへ戻り始めたが、実際には、ほとんどの企業が100%オフィス復帰は求めているのが実態で、今後は「リアルとリモートのハイブリッド」がニュー・ノーマルになると見込まれている。ヘルスケアも同様で、パンデミック中に急激に浸透したテレヘルスは、患者・医療者双方から圧倒的な支持を得て定着している。コロナは奇しくも米国のDX推進の強力なエンジンとなった。

ヘルスケアDXの恩恵を米国民が実感したのはワクチン接種の行政対応がきわめて効率的に実施されたからである。予約はオンラインで簡単にでき、接種サイトの受付は係員が個人情報を入力。ワクチンの受け手の手書きの問診票や保険証は携帯端末で撮影してデジタル保存。ワクチン接種が済むと2回目の予約は接種後の15分の待機時間中に端末を持って会場を歩き回っている係員が簡単に済ませてくれた。受付からワクチン接種を挟んで次回予約まで30分もかからず、実にスムーズだったのである。もちろん2度目の接種に行けば、保険証番号で前回接種済みのワクチン情報が呼び出され、2度目の接種内容がそれに追記されるという手軽さであった。「こ

れがお役所仕事?やればできるじゃん!」というのが国民の実感で、この便宜の前に、個人のヘルス・データを行政に管理させることへの反感はほとんど雲散霧消したという印象である。

2022年5月末現在、米国の満5歳以上総人口の約82.8%が少なくとも1回以上のワクチン接種を終え、パンデミック収束の目安と言われる対人口比ワクチン接種率75%を超えた。連邦検疫機関CDCのウェブサイトにはCDCが採取・集計・解析している詳細なコロナ関連データがリアルタイムで公開されているが、国民の行政データへの信頼はかなり高い。<https://covid.cdc.gov/covid-data-tracker/#datatracker-home>

米国では5月にマスク規制が解除されたが、例えばこのような規制解除等の行政措置に関する意思決定なども、米国では客観データに基づいて決定・実施・説明されるようになった。

### プロフィール

#### メディカルジャーナリスト 西村由美子 氏

お茶の水女子大学大学院修了後、89年に渡米。91年からスタンフォード大学アジア太平洋研究センターでプロジェクト・マネージャーとして医療問題の国際比較研究を手がける。2004年に独立し、医療・健康・教育・コミュニケーションなどの分野で新規ビジネスを企画・創出するフリーランスのプロデューサーとして活動中。

公的職務としては

- (公財) Ronald McDonald House Charities Japan 評議員
- 厚生労働省医療系ベンチャー振興推進会議構成員
- 経済産業省イノハブ・アドバイザー

このほか AI Samurai 社外取締役、Whole Earth Foundation アドバイザー、FRACTA 顧問兼任。



## 一般財団法人オレンジクロス 2022年度セミナー等のご案内

### ● オレンジクロスセミナー 賛助会員無料 一般参加1,000円

日 時：2022年10月7日（金）15時～17時

開催方法：オンライン開催 先着80名

演 題：制度サービスで Well-being はつぐれない

演 者：東京家政大学 教授 松岡洋子氏

概 要：税金が潤沢にあった「福祉国家」の時代から、支える層がいなくなる「少子高齢社会」へ。

世界の多くの国で、健康についての考え方が大きくパラダイムシフトしている。

「できないこと」に対して専門職（医療・介護）の「制度サービス」を提供するやり方を続けていると、制度は破綻する。その人の「できること」「したいこと」を対話によってしっかりと引きだして、地域の資源で解決していくほうが、一人ひとりの Well-being にしっかりとフィットする。人は「制度」の中に生きているのではなく、ずっと「地域」に生きてきた存在だからである。デンマークでは、1980年代から整備してきた「イェムプライエン」という24時間型在宅ケアを削減するために2015年以降闘ってきた。イギリスでも2014年の法律で「Well-being 原則」を掲げてパッケージ型のケア提供からの脱却を図っている。「Cure から Care へ。さらに、生きる (Well-being) へ」。この道を過激に歩むオランダの様子も含めてお伝えし、意見交換の糸口としたい。

申 込：下記 URL から9月30日（金）までにお申込みください。

ご参加のための URL を10月3日（月）～5日（水）までに一斉にメールにてお送りいたします（賛助会員を含む）。

振込先口座：三菱 UFJ 銀行 上野中央支店（支店コード065）普通口座 口座番号 0201264

なお、いったん振り込まれた参加費は、ご欠席の場合でも返金いたしかねますので、ご了承をお願い申し上げます。  
（申込用 URL）<https://ssl.form-mailer.jp/fms/d1bea2df749667>



## 一般財団法人オレンジクロス 賛助会員募集のご案内

一般財団法人オレンジクロスの活動趣旨・取り組みにご賛同いただける個人・法人の賛助会員を広く募集しています。

- 賛助会員年会費：個人会員（1口）10,000円 法人会員（1口）100,000円
- 期 間：毎年7月1日～翌年6月末日
- 賛助会員特典：① 各種情報提供 ② 広報誌の配布 ③ 各種セミナーの無料招待
- 申し込み方法：弊財団ホームページ (<https://www.orangecross.or.jp>) 「賛助会員について」から申込書をダウンロードしてください。メールに申込書を添付して [info@orangecross.or.jp](mailto:info@orangecross.or.jp) までお送りいただくか、FAX または郵送でお申込みください。

（アイウエオ順）

法人賛助会員	URL
株式会社コスモスケアサービス	<a href="https://www.cosmos-group.co.jp/care">https://www.cosmos-group.co.jp/care</a>
社会福祉法人 新生会	<a href="https://www.sun-village.jp/">https://www.sun-village.jp/</a>
株式会社ツクイ	<a href="https://www.tsukui.net">https://www.tsukui.net</a>
株式会社デベロ	<a href="http://www.develo-group.co.jp">http://www.develo-group.co.jp</a>
日本生活協同組合連合会	——
公益財団法人 星総合病院	<a href="http://www.hoshipital.jp">http://www.hoshipital.jp</a>
株式会社やさしい手	<a href="https://www.yasashiite.com">https://www.yasashiite.com</a>

（2022年7月1日現在）



## 一般財団法人 オレンジクロス

広報誌 オレンジクロス | 夏号 2022 SUMMER VOL.13 | 2022年8月1日発行

発行：一般財団法人オレンジクロス

〒104-0031 東京都中央区京橋2-12-11 杉山ビル6階 TEL. 03-6228-7216

<https://www.orangecross.or.jp/>



本誌は、「植物油インキ」「水なし印刷」を採用した環境にやさしい印刷物です。